

# 貧富幸不幸

幸田露伴

青空文庫



もしそれ真の意味に於て言を為せば、貧と富とは幸福と不幸福とに對して相即くところは無い。貧でも幸福であり得、また不幸福であり得、富でも不幸福で有り得、また幸福で有り得るからである。しかし世上普通の立場に於て言を為せば、貧ということは不幸福を意味し、富ということは幸福を意味することになって、貧富は幸不幸に相即くものとなって居る。貧は不自由と少能力との体であり、富は自由と多能力との体であるからであり、また實際に於て世人の多数は、体験上に貧即不幸、富即幸の感を繰返すことの少く無い記憶からそう認めているのである。

理窟は附けかた次第のものである。感じは変移不定のものである。

る。どちらも余り当にはならない。貧富を幸不幸から引離してしまおうというのも、理窟は兎に角、余り甘心する人はあるまい。貧富を幸不幸に即けてしまおうというのも、そんなに面白い見解では無い、俗過ぎる。

釈迦の弟子の中に優れた者が二人あつた。その一人は富家の出であつた。そしてその男は富者を憐愍した。それは富者をかわいそうなものだほんとうと眞実に感じていたからで、そこで濟度の善好因縁を造り出そうが為に、その男は貧者をしばらくお擱いて富者のみ接近して、これを善誘せんと、托鉢する場合には富者の家の前にのみ立った。他の一人は貧家の出というほどでも無いが貧者を憐愍して、つくづく貧者を幸福にしたいと思つた。そこで自分

の托鉢する場合には貧者の家をのみえら択んで立つて、伝道化度の好因縁を造ろうとした。富貴の門はそのかえりみ顧るところで無かつた。二人とも道理のある考で有り、美しい感情の流露であつた。しかし釈迦は二人を弾可した。それは傾かんよりは平らかに、私有らんよりは公に、貧富を択むの念に住せずして平等に化度したが宜しいという意に於ておいであつた。これは勿論もつともかなの事で、人天の導師、一代の教主たる以上はこう無くては叶わぬ筈である。釈迦の親族で、無論高貴の種姓で、そして二十相好を具えたと云わるる美男で、かつまた心の優しい、しかも道に進むの望を有して弟子となつていた阿難あなんは、この事を目撃して、成程貧富を平等に視なければならぬと考えたので、如何なる家をも択ぶこと無く接近

した。ところが阿難はまだ前の二人の弟子にも劣っていた境地の身分であつた。ただその所行のみが釈迦の言を實現したのだつた。そこで偶然に最も鄙いやしい種族の家をおとずれると、忽たちまち其家そこの女に惚ほれられてしまつた。貧富の前に大手を振つて歩いたのは可いが、恋という変な者に掩えんげき撃されたので、鉛の獅子ししが火に逢つたように忽ちぐにやりとなつてしまつて、捕虜にされて危く自体を失わんとするに至つた。この魔鄧まとうによ女因縁の譚は面白いことを表わしている。貧富などいうことは恋の烈火の前には一片の塵ぐらいなものだ。

閑話休題、貧者は多い、富者は少い。貧の為に嗟嘆したり怨憤したり、甚はなはだしきに至つては自ら殺し、人を殺すに至る者もある。

されば同じ事なら貧の為に何か言ったり考えたり行<sup>や</sup>ったりした方が面白い。少くとも多くの人は貧乏が大嫌い、その嫌いなものが生憎<sup>つきまと</sup>附纏<sup>つぎまと</sup>って来るので困苦しているのだから、貧即不幸なぞという妄信ぐらゐは除却するようになりたいものだ。しかし自分も貧乏が大<sup>だい</sup>好<sup>すき</sup>だとも云<sup>い</sup>兼<sup>かね</sup>る。貧乏神の洩団扇<sup>あお</sup>で煽<sup>あお</sup>がれて戦<sup>ふる</sup>えながら、ああ涼しいと顎を撫でるほど納まりかえっている訳にも行かぬ。また多くの人に対して貧乏宗宣伝を試みんとする如き料簡も無い。ただ貧の為に、貧即不幸と決めている人々があつたら、その妄信を妄信なりとして排したい。

貧乏は嫌がるから辛いので、辛いから不幸を感じるのだ。洩いものや苦いものは嫌がる人が多いには違い無い。しかし嫌がるべ

しと定まった訳でも無い。嫌がらない人になれば錢を捐すてて洗うるかを買つて食べて喜んでゐる。露ふきの臺とうを温灰焼にして食えば苦いには違い無い、しかし中々佳い味だ。甘いものは好む人が多いには相違無い。しかし甘藷かんじゆなど食うのは、嫌がる人になれば随分恐ろしい刑罰ぐらいに思うものもある。蛆うじの生じてゐるものは食いたがらぬ人が多い。しかしチーズを嗜む者は誰が蛆を嫌がろう。蜂の卵を食うのは蛆その物を食うのであるが、嫌がらぬ段になれば高い価を払つたり、または蜂に螫さされなどしてもその品を得て喜んで居る。魚や鳥獸の肉は、人々皆自己等おのれらはその新鮮なのを賞してゐると思つてゐる。そして少しも嫌がつて居らないのであるが、何ぞ知らん真に新鮮な肉を提供すれば、この魚は寄生動物が



居るとて鰹かつおや鰺ぶりを人々は斥くるであろうし、この鶏肉は硬い、この牛肉は硬いとて人々は喜ばぬであろう。人々はやや陳ふるい鰹や鰺や鶏肉牛肉を嫌がらないで、実は自己等の嫌がらぬ度合のやや古い魚鳥獣肉を新鮮と名づけて居るのである。煙草を厭わぬ動物は少い。人間も初めて吸煙する時、咳をしたり涙をこぼしたり眩暈めまい気味を感じたりせぬものは少い。しかし嫌がらぬ段になれば驚くべき消費を敢てして、獅子の香炉の如くに鼻の孔から白い煙を吐いて、こればかりはやめられぬなどと喜んでゐる。人々回顧を試みよ。幼年時代少年時代より壮老に及んで、自己の最大喫緊事件たる食物に於ける嫌がる嫌がらぬと好く好かぬとの変化遷移に驚かぬものは無かろう。初めは何なんびと人いえどと雖も甘いものを好み、漸ようやく

成長するに及んでは、砂糖の多い物即ち美味なりとするが如き幼穉うちの境を蟬脱せんだつして、甘味即美味の妄なるを不知不識の間に会得し、また幼穉の時代に於て嫌おひがった多くの物に於て嘆美すべき真味の佳なるものの存することを認めるに至るであらう。

嫌がる嫌がらぬというは主観的である。そしてこの主観的のそれはただその時に於てのみ真である、他の時に於ては真で無くなるのは争うべからざる事実である。しかし時間に於て持続し、多数間に於て相同じき時は、牢として抜くべからず、儼げんとして動かす可べからざるものの如く見え、習慣的惰力を生ずるに至るのもまた争う可べからざる事実である。貧を嫌がり、その嫌がるところの貧に附纏つきまとわれ勝なところから、貧即不幸と感ずるのもこの理に

よるのである。が、貧と不幸とは必ずしも徹頭徹尾取離すことの出来ぬ関係にあるものではない。甘味即美味とする幼稚の味覚と、富即幸福とする多数人の考とは、事情が甚だ酷く相肖あいにている。甘味少ければ美味ならずとするのと、貧即ち不幸福とするのとは、甚だ酷く相肖ている。その実を云えば、貧でも幸福があり得、富んでも不幸があることは、少しく世相を看破した人にあつては誰も認知していることであることは、喩たとえば砂糖の有無多少が必ずしも美味不美味に正比例をなさぬと同じきが如くに受取られるのである。多数の厨婦が砂糖や味醂みりんの崇拜と妄用によつて却つて真の美味を害する結果を生ずると同様に、多数の人々は富の崇拜、貧のいやがりに因つて、却つて真の幸福を自害自損している。貧

を厭い富を欣ぶよろこの念を今少し緩くするか、もしくはこれを放下し  
さえすれば、幸福を生じ、もしくは幸福であり得るものを、貧即  
不幸福の俗見に囚はなはだわることの甚しい為かえつに、却て幸福を失してい  
ることは甚だ多い。貧即幸福と云つては矯激になるが、貧を厭う  
の念をさえ忘るれば即座に幸福であり得るものを、厭貧の念に駆  
られて悶々戚々の境を現じて居る者の甚だ多いのは、その人の為  
に痛惜に堪えぬことである。人皆原げんけん憲がんかい顔かんかい回たれといふのでは  
無いが、蓬ほうすう樞しう甕おう牖いう簞たん食し瓢ひょう飲いんでも幸福の存し得るものである  
ことを会し得て的確ならば、貧もまた然さのみ厭わねばならぬもの  
で無いことは明らかである。原憲顔回きようがの境きようが界がいに到らずとも、  
遊ゆうがい外老人位でさえ、「貧は人を苦めず、人貧に苦しむ」といふ

句を吐いている。老人は貧の人を苦しめぬものであることを知つて幸福に朝暮を送り得たのである。語り物によれば、貧乏で名高い曾我の若殿に愛を捧げた美人も、「貧の病は苦にならず、ほかの病の無かれかし」と喝破している。いい女だ、洒落ている。意氣愛す可<sup>べ</sup>しだ。勿論恋愛というものは桂馬という将棋の駒が如何なる他の駒の威厳をも無視して働くように幽奇神奇の働をするものだから、恋愛に憑かれた者は随分俗物でも貧富位は容易に突破超越してしまうのであり、貧乏即不幸福などいう妄見はその靈光によつて照破してしまうのである。俚謡<sup>りよう</sup>に「竹の柱に茅の檐」と唱うのも、「手鍋提げても」と唱うのも、貧即不幸福の妄見を照破してしまつている手近い例だ。しかし貧乏嫌いの女房となると、

亭主に對<sup>むか</sup>つて「ほかの病は苦にならず、貧の病の無かれかし」と念ずる。黄金運の無い夫と見ると、生命保険にさえ入つて居て呉れれば卒中で死んで貰つた方が世の中の融通が好い位に思われぬでも無いか知れぬ。それも中々洒落ているだらうか知らぬが、亭主の身になつては面白くなさそうだ。そこで亭主も富即幸福の宗門に帰依してしまふ。しかし富には到り易く無い。即ち大抵は幸福を感じずに、埋地の足<sup>たしまえ</sup>前にもならないアスガラになつてしまふのである。いよいよ面白くなさそうな事だ。寧ろ貧富と幸福不幸福とを正比例だと思ふ如き妄見を脱却して、貧乏は貧乏でも幸福は幸福であるという見方にして、灰打ちたたく<sup>うるめ</sup>鯉一枚を二人で飯の菜にしても、清く面白く暮らした方が端的に美的生活即幸福生

活である。「細工人は一生貧なるものと覚悟して」と云った彫金家の安親の生活は幸福であつたろうと思われる。明治のその彫金家は富んだ。しかしその生活は美的でも幸福的でも有つたとは思へぬ。

貧即不幸福の宗門者は、ともすれば食えなくては堪らぬということを説く。恋しさとひもじさとは、ひもじさが痛切だということの歌が有る。また「死ぬほど惚れても貧乏人はいやだ、出来りや吾が児が寒ざらし」などという俚謡もある。いずれも半面の真を露わして居るが、全部の真では無い。半分は嘘だ。安心すべし、身を投げて死なんとしても大抵は死ぬ世である。「肩あれば着ざる無く、口有れば食わざる無し」という古語の通りで、肩が無

くならぬ限り、口が無くならぬ限りは、飢寒で死ぬことは少い。

ロシア露西亞の如き国状を醸し出すところの きようもう狂 妄 ろうお陋悪の思想や感情

が行われたら飢餓で死ぬ人も沢山出来るであろうが、然さもない限

りは貧乏は生命に別状は無いものだ。貧乏を嫌がる強迫観念の強

烈なのに囚われたものだけが生命に別状を起すのである。滔とうとう々

たる世上の人、実は大なり小なり厭貧的強迫観念に囚われて苦し

んでいるのでは有るまいか。稀有な事例に属する病的苦悩を抱い

て居る者を、医家も世人も強迫観念に囚われて居るといふが、達

者の眼から見たら大抵の人は貧即不幸福の強迫観念所有者で、そ

れは慥たしかに病的であるのでは有るまいか。一ツ目小僧ばかりの国へ

行ったら二ツ目のある普通人が見世物にされたといふのと同じ話



で、いにしえ古から貧乏を然ほど苦にせぬ人々は、貧乏を苦にする人々の多い世の中では奇談の材料とされ稀有の変人とされているが、実は多くの貧乏を苦んでいる人々の方が、苦んでいるだけ即ち病的なものでは有るまいか。貧乏で首を縊くる人も無いことは無い。しかしそれは貧乏がその人を殺したと云わんよりは、貧乏即不幸福の強迫觀念がその人を殺したと云った方が正しかろう。何故というに、貧に安んずれば必ずや死に臨む前に於おいて既に早く幸福と希望と勇氣とを得て、極端の場合に差さ逼せまるに至らずに済むであろう。貧乏を嫌がり嫌がりて日を送るから愈いよいよ々貧乏になる。愈々貧乏になりて極端の貧乏と面を対わずに及んで堪えられなくて死を取る。その心状は悲しむべき者である。故にその死を取らんとするに当

りて偶々たまたまある或事情によつて死せざるを得る時は、その病的觀念は却て破壊し潰滅して、そこに健的人と更生し、即ち勇氣に満ち希望に生くる人となつて働き出し、そして社会に於ける地平線上の人となるに至るを得るの实例は数々見受くるところである。

忌憚無く言わしむれば、貧即不幸福の妄信が生じてより以来、人々は長い間沈淪している。しかしこれは世が未だ進歩せぬからである。砂糖氣の少い者は美味で無いと信じている程度の味覚を有せる如き人々の程度であるからである。そして今日の人々は他人の有もてる砂糖を我等が有ち得たらば幸福で有ろうと云うが如き妄想を有している。学者も為政者も社界の眞の幸福を希求する人々も、財の分配がすべく行われたら社会は幸福になるだろうと

思っている。しかしその根本には甘味偏重の幼稚なる感じの如き財利偏重、貧乏大嫌いの幼稚なる考が強迫観念の如く附纏つきまとうている。眞の幸福というものはそんなところから獲得されるものには無い。馬鹿馬鹿しい程後れている世だ。快よくその幼稚な境界を世が経過してしまわぬ間は、世は何時までも不幸福を感じずる人によつて満たされるであらう。

富即幸福の信条に住して偶々富を得た人々の方はどうだ。この人々の中、聰明な資質を有して居る人々は、自己の妄信が自己を幸福に為さ無かつた事に気づかぬ訳には行かぬ。極々愚鈍ごくごくの富者は小間物屋の肆みせ前に立たつて、噫あ悲あしい哉かな、今は吾が買べう可べき何物をも新に見出し得えざるに至いたつたと嘆なげじて、何か買べいたい物の

有った時の幸福さを味わうと同時に、豊満せる財囊を抛ち棄てて  
 落涙するという昔話を其儘そのまま演出するに終らねばならぬ。それ以上  
 の大病的なる富者は、既に富んでもなおその心は貧しくて、弥  
 が上にも富を欲して、一生貧乏人と同様に戚々汲々として終る者  
 もある。これは本より痴愚癡ちぐふうてん癲癩てんらんの類で、三度も生れ代らなけれ  
 ば貧乏人にもなれぬ程の不幸な人で、論外である。そこで富者は  
 富即幸福の妄信の破れると共に、或は趣味あそびに生きようとしたり、  
 或は道義に生きようとしたり、或は名誉慾めいよよくに生きようとしたり、  
 或は知識慾ちしきよくに生きようとしたりするに至る。名誉知識を欲する者  
 は尚他日復ふたび背負投せおを食わされる、その名誉知識を獲得した暁の  
 気づかわれる事であるが、これは中々満足を得難いものであるか

ら、そのうちにお迎えに遭遇して厭々ながら引ずられて行く。最も聰明な者は犠牲的精神に満ちた月日を送るが、仔細に観察すればその日常は高貴でこそあれ、貧乏人が富を得んとして働くのよりも中々楽で無いもので無ければならぬ。楽をしたい、安閑を樂しみたいなどと思う者は忘れても富者などになるべきものではない。最もいきな者は全部の富を抛り出してしまつて、虚実は不確だが龐居士の如くその日暮らしの箴籠造りなんぞになつてしまふのである。いい。実にいい。富者になつたところで最もいきなのが、箴籠や味噌漉造りになるのである。味噌漉の底にたまれる大晦日こすにこされずこされずにこす、貧乏の方が一寸面白味が有ろう。双六は上らぬうちが面白いのだ。貧富何ぞ論ずるに足

らんや、ただ一日を如実に働くべきのみ、幸福も不幸福も忘れた  
時が真の幸福であるだろう。

# 青空文庫情報

底本：「仏教の名随筆 1」国書刊行会

2006（平成18）年6月20日初版第1刷発行

底本の親本：「露伴全集 第二十五卷」岩波書店

1979（昭和54）年5月18日第2刷発行

初出：「現代」

1923（大正12）年1月号

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2019年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 貧富幸不幸

幸田露伴

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>